

事業成果報告書

1. 個人または団体名(団体の場合は代表者名も記入)	
Turmunkh Odontuya トゥルムンフ オドントヤ	(代表者名:)
2. 研究または活動のテーマ(課題名)	
社会主義とポスト社会主義時代のモンゴルにおける女性の再生産に関する意識の変化に関して — 子だくさんの女性を奨励する『名誉母』叙勲制をめぐって —	
3. 助成額	
42 万	円
4. 実施期間	
2015 年 7 月	～ 2016 年 6 月 (12 か 月)
5. 実施状況	
<p>2015 年 7 月から 2016 年 6 月までの間に調査を実施した。調査実施にあたって調査日程の作成をはじめ、以下の①から⑤の作業を主に行った。</p> <p>①モンゴル語の文献、資料の検索、収集 ②日本語の文献、資料の検索、収集 ③モンゴルの関連機関、女性団体の担当者及び関係者へのインタビュー ④インフォーマントたちへの聞き取り調査の実施 ⑤論文作成</p> <p>① モンゴル語の文献、資料の検索、収集 (実施期間 7月中旬～8月中旬) ウランバートル市にある国立中央図書館、モンゴル国立大学付属図書館にてモンゴル人女性の妊娠、出産、育児、家族計画に関するモンゴル語による文献リストを作成し、文献・論集の検索を行った。また資料のコピーや取り寄せを行い、資料の収集作業を行った。</p> <p>② 日本語の文献、資料の検索、収集 (実施期間 1月6日～1月18日) 宮城県仙台市に 2 週間程度滞在し、東北大学付属図書館とエル・ソーラー仙台(施設男女共同参画推進センター)の図書資料室を利用し、家族計画、主婦論、育児論に関する日本語による文献・論集の検索、収集を行った。また、社会主義とポスト社会主義社会を含む社会的変革による制度的変化などに関する論集・文献の検索、収集も行った。</p> <p>③ モンゴルの関連機関、女性団体の担当者及び関係者へのインタビュー (実施期間 8月中旬～9月中旬) ウランバートル市に活動しているモンゴル人女性の関連機関、団体の担当者らに連絡を取り、インタビューを行い、必要な情報の提供を行った。これには;</p> <ul style="list-style-type: none"> ・『名誉母』叙勲者女性連盟の会長に当連盟の活動についてお話を伺い、資料を提供してもらった。 ・モンゴルの人口開発保障省の家族女性問題政策開発課の福祉問題担当者に子だくさんの女性の社会福祉制度に関して、また『名誉母』叙勲者女性への報奨金と子ども手当など補助金額の変更に関してインタビューを行い、資料を提供してもらった。 ・モンゴル古文書管理署にて『名誉母』叙勲者の統計データ検索(1958年から2004年まで)を行い、モンゴル大統領プレスセンター『名誉母』叙勲者の統計データ(2005年から2016年まで)の提供を行った。 <p>④ インフォーマントたちの聞き取り調査の実施 (実施期間 9月下旬～12月末) インタビュー調査を実施するために準備をし始めた。インフォーマントの特定を行い、アポをとった。また、</p>	

質問リストを作成し、準備した。9月下旬から12月末まで大体1週間に1名へのインタビューを記録することを目標とし、調査を続けた。ウランバートル在住の40代～60代の女性12人にヒヤリングを行った。また、聞き取った内容を整理し、テープ起こしをし、モンゴル語から日本語への翻訳を行った。インタビューの継続時間はおよそ30分から1時間半に及び、人それぞれ異なっていた。

⑤ 論文作成

(実施期間 2月上旬～6月)

2月から検索・収集したモンゴル語と日本語の文献・論文・資料の整理を行い、チェックしておいた内容を網羅的に再度分析を行い、論文を作成し始めた。およそ3ヶ月間にわたって原稿を作成し、6月に終了した。この期間中に、また不足資料の追加なども行った。東京外国語大学の『アジア・アフリカ言語文化研究』誌に投稿するため当誌の投稿規定にしたがって原稿を作成し直した。現在、査読中である。

6. 事業成果と自己評価

事業成果

2015年7月から2016年6月までの間に「社会主義とポスト社会主義時代のモンゴルにおける女性の再生産に関する意識の変化に関して—子どもさんの女性を奨励する『名誉母』叙勲制をめぐる—」と題して調査を行った。

本調査では1921年から1990年までを社会主義時代、1991年以降をポスト社会主義時代(以下、ポスト時代とする)とし、両社会体制にわたって実施されている『名誉母』叙勲制を取り上げ、国家体制の変革に伴う女性たちの母性叙勲制への考え方と再生産に対する意識の変化に関して調査した。女性たちへの聞き取りと文献調査を主とした本調査では、国家体制変革後の25年間、モンゴル人女性の母性叙勲制と再生産への意識的变化に関して取り上げ、以下の3点から考察した。

1) 家族計画に関して

社会主義時代、人口増加政策などによって避妊機会は剥奪されていたため、子どもを産むことは女性や家族が決める個人のコントロール範囲内のことではなかった。一方、ポスト時代は、避妊の制度的抑制が根本的に解放され、子どもを産むことは女性や家族が決める個人のコントロール範囲内のこととなった。この社会環境の変化が女性たちの再生産への意識に大きな影響を及ぼしていた。ポスト時代の女性たちの事例では、家族計画のための環境が整ったことで、女性たちの再生産への意識が高まり、家族構成を考えるようになったことが分析できた。社会主義時代、3%に達していた年間人口増加率が、社会変革直後の1992年に0.1%まで急落し、2000年代後半から2.0%前後に留まった。また、モンゴル人女性の一生に出産する子どもの平均的人数は、社会主義の1963年に7.9人、1973年に7.5人であったのが2012年に2.7人、2014年に3.1人と減少した。これらのデータは、女性たちが希望通りの人数しか子どもを産まなくなり、家族計画を行うようになったことを裏付けている。

2) 育児に関して

モンゴルの育児には社会主義とポスト時代から多様なバリエーションが存在した。託児施設、妻夫方の母親、兄弟姉妹など育児は広範囲の親戚の分業によって行われ、比較的緩やかな制度であった。しかしこの比較的緩やかな制度を保ちながらも、ポスト時代の育児に現れた大きな変化は、育児に専念する女性たちの出現であった。「子どもは育つもの」および「社会の子ども」として扱っていた社会主義時代の女性たちの育児観とその育児実態が、「子どもは育てるもの」および「私たち家族の子ども」と扱うようになり、ポスト時代の女性たちの育児意識が大きく変わっていた。このことから、女性たちは家族計画を行い、希望した人数の子どもを希望する時期に出産した子どもを丈夫で立派に育てるため意識が高まっていると検討できた。

3) 専業主婦に関して

社会主義時代は男女ともに社会労働が義務とされていたため夫婦共働きが一般的で、女性も働いて

いた。法律上では産休休暇が出産前後を含め 102 日間しかなかった。女性たちは結婚しても、何人もの子どもを出産しても、社会労働を続けていた。しかしポスト時代になると、法律上では産休休暇が 2、3 年間とされ、長期になった。社会主義時代の女性たちにとって典型的な生き方であった「継続就業」が、ポスト時代では一定の期間でも家事や育児に専念した後、再び仕事に戻る「中断再就職」に変わっていた。さらに、一昔前は存在すらしなかった専業主婦という女性の生き方が、女性のライフコースの一つとして認識され、モンゴル人女性の多様なライフコースの一つとして着床しずつあることが分析できた。

結論をまとめると、社会主義時代の「子どもができる」という概念がポスト時代では、「子どもをつくる」という概念に変わり、「できたから出産する、出産するしかなかった」といった状況に「産むか産まないか、いつ産むか」と選択肢ができて、女性たちは家族計画を自主的かつ計画的に行うようになった。そして望む人数の子どもしか生まず、計画して産んだ「わが子」を立派に育てたいための育児意識がよりいっそう強くなっていった。したがって、これは育児に専念する女性、さらに専業主婦を選択する女性たちを生み出す実態となったことが検討した。

自己評価

本調査では、社会主義時代とポスト時代の女性たちの再生産への意識的变化に関して文化人類学の視点から分析し、考察した。モンゴル人女性に関する研究における本調査の意義として以下の 2 つが挙げられる。

一つ目は、モンゴル人女性に関する研究には、社会主義時代に行われた研究の場合、女性解放、女性の地位向上、女性に関する政治政策を評価した内容が普遍的で、ポスト時代に行われた研究の場合、貧困、失業と女性の社会諸問題を把握する実態調査報告が主であった。本調査は、文化人類学の分析方法を用い、女性の当事者に聞き取りを行い、女性たちの証言・回想を記録し、女性問題を意識しながら考察を行った。つまり文化人類学の視点から研究を取り上げ、分析したことが、モンゴル人女性に関する研究の視野を広げる一つの試みとなり、その分、貢献ができたと考えられる。

二つ目は、モンゴルは社会主義とポスト社会主義という歴史的大きな二つの国家体制を経験している国である。本調査では、この社会主義時代とポスト時代の女性たちの状況を比較し、考察した。つまり社会主義時代とポスト時代という長期タイムスパンを研究対象とし、それぞれの時代を経験した・経験している女性たちの証言を比較し、考察したことが、モンゴル人女性に関する研究(比較研究)においても一つの試みとなったと評価できる。

調査を実施する際、当初の予定に一部変更があった。

1) 調査実施期間の変更

日本での文献資料の検索を 2015 年の 9、10 月に行う予定であった。しかしモンゴル国内での調査が次々に続いたため、日本での調査を 2016 年の 1 月に変更しました。モンゴル国内での文献、資料の収集作業とインフォーマントたちへの聞き取りが一段落した後、日本に行き、資料検索を行った。

2) インフォーマントの人数の変更

ポスト時代の出産、育児を経験した女性およそ 15 人にインタビューを予定し、各自に連絡を取り、準備を進めた。しかし、3 名の方々の場合、インタビューの当日にそれぞれご都合がわるくなったため実施することはできなかった。もう 1 名の方の場合、インタビューを実施した後、調査への参加を断りたいという連絡があったため、そのインタビュー内容を無効とした。実際、11 名の方々にインタビュー記録を行った。

3) 投稿誌の変更

原稿作成に当たってかなり時間が必要とされ、投稿予定であった「東北アジア研究」誌への提出を見送り、『アジア・アフリカ言語文化研究』誌に変更した。